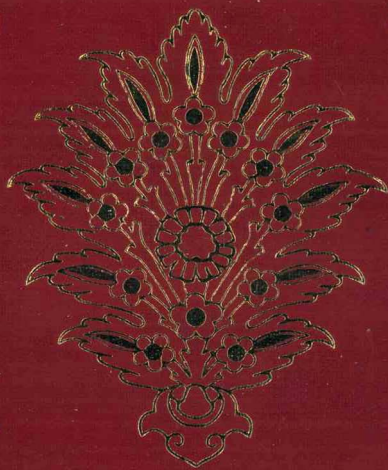
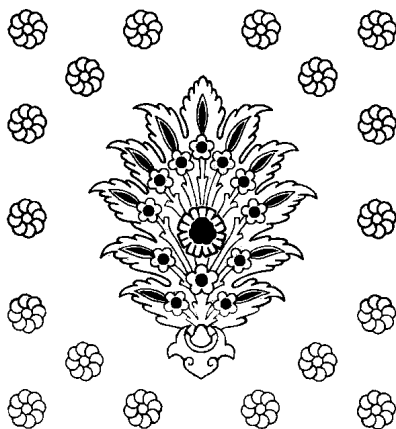




日本文学全集 68



永井龍男
田宮虎彦



集英社

日本文学全集

全88巻

68 永井龍男
田宮虎彦集

昭和四十九年一月八日 初版
昭和五十五年九月十五日 五版

著者 永井龍男
田宮虎彦

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 英社

101 東京都千代田区一ツ橋三ノ五ノ二

出版部 東京(230) 三六
電話 販売部 東京(233) 三六

印刷 中央精版印刷株式会社

著者との了解により換印廃止いたします。
落丁本、乱丁本はお取りかえいたします。

編集委員

伊藤 整
井上 靖
中野 好夫
丹羽 文雄
平野 謙

挿 装
絵 幀

加 後
山 藤
又 市
造 三

目次

永井龍男集

皿皿皿と皿

七

✓ 黒い御飯

九

✓ 往来

六

『あいびき』から

一七

、胡桃割り

二三

✓ 朝霧

二九

✓ 青電車

一五

✓ そばやまで

一六

白く柵

一四

✓ 小美術館で

一七

電車を降りて

一九

✓
蜜柑

一九

✓
一個

一五

田宮虎彦集

小さな赤い花

二五

足摺岬

三三

銀心中

三三

注解

三四

作家と作品

江藤 淳

四二

年譜

四三

永井龍男集

物事も素直に

感じとる

老人に

なりたい

龍男



皿皿皿と皿

浦島太郎

東京駅から一時間ちよつとで、電車はこの駅に着く。
あいた座席にもあみ^だ棚にも、読み捨てた夕刊がそこ
こに眼立つ。

駅前にバスが数台、電車から降りてくる人を待ってい
る。駅の表の時計は、九時過ぎをさしている。その時計
は明るく、駅の高い屋根の中央にあるので、学帽に着け
た記事のようにも見えた。

海の方と、山寄りの方に別れて、やがてバスが動きだ
す。

東京へ通勤している客は、もうたいてい家へ帰った時
刻だし、東京から避暑に來たり、泳ぎに通^かつてきた客
も、もう半月ばかり前に、ようやく後を絶^たった季節で、

バスの中にも町筋にも、ぼつと一息ついているような静
けさがある。

海寄りに行くバスが、銀行の前やパン屋の前を通る。
八百屋の店先には、まっ青な蜜柑^{ミカン}が積んであった。大き
な寺の次の停留場で、ボストンバッグをさげた三浦貞作
が、たった一人下車した。

古いソフトもレインコートも、彼が五十九歳であるこ
とを証明し、もう二三日で十月の來るのを説明している
かのようである。

三浦貞作は、写真製版技術のベテランで、停年後も一
週に三日、東京の会社へ顔を出す。今夜は、名古屋に新
設された工場へ出張して、一週間ぶりに家へ戻るのでは
ある。

タバコ屋を兼ねた薬局が一軒、通りに灯をこぼしてい
るだけで、その辺は住み古した住宅ばかりである。バス
の行ってしまった後のくらがりに、三浦貞作の靴音が聞
えはじめる。瘦^やせた男だなどは、その足音だけで分る。

ところが、ものの四五間行つたあたりで、三浦貞作は
立止ってしまった。その大通りから、自分の家の門灯
が、植え込みの芭蕉^{ハセ}の広葉が見えたからである。そんな
はずはありえない。貞作の家は横丁の奥なのである。
とにかく、様子が一変している。

「……そうか。とうとう、ここまでやりやがったか」

そう、貞作が思い当ったとたんに、

「パパ、おかいんなさい」

と、うしろから声をかけられた。

「カバン、持つわ」

娘の明子が、もうカバンを取っていた。

「どこへ行ったんだ」

「電球が切れちゃったの。灯下親しむ候でしょ」

と、笑って紙包みを示した。

「道を間違えたかと思った。あれが、家だろう？ 奇麗

にやったもんだね」

貞作は、レインコートのポケットに両手を突っこんで
呟いた。

「そうなのよ。バスの窓から、家の門が見えるんですもの。なんて、小さな家なんだろうって、感心しちゃった」

ここには、つい一週間前まで、大きな邸があったのだ。大正から昭和の初めにかけて、政界の裏表で活躍したボスの建てた家だが、その爺さんが死んでから、持ち主は転々として、最近では人が住んでいるのかいないのか、外からは見分けがつかなかった。

歌舞伎の舞台装置のような、たっぷり両袖を持った門

構は、バスの埃を浴びたまま水い間縮切られて、抵当に入っているとかいなとか噂されているうちに、貞作が出張旅行に出る二三日前から、きゅうに人足の出入りが激しくなり、トラックが行ったり来たりして、邸内で幾枚かに別れた建物が、すべて取りこわされてしまったというわけである。

「やっぱり広いわ。全部で、二千坪とかって言ってた。パパ、あれ見た？」

明子に指されて、貞作はその空地の一隅に白壁の土蔵を見つけた。それだけが、どこかの灯をうけて、ほんのり白く残っていた。間の抜けた、淋しい眺めである。

「そうか。おれが発つ前は塀にかこまれていたからな。それで、まるきり感じがちがってしまったんだ」

「横丁は、瓦のかけらと壁土でたいへん。気をつけないと……」

邸跡の空に、海に近い星がいっぱい光っていた。

三つのやかん

通勤の身仕度を終えた明子が、腕時計をまきまき、茶の間の食卓についた。

スイッチを入れればいいように、パン焼器もそこにあ

った。

「……ねえ、ママ。あたしが顔洗っている時、誰か来てたわね」

と台所の方へ向いて、明子が言った。

「来ていたんじゃないわ。もう、帰るところだったのよ」

「どっちでもいいけど、誰？」

「大谷さんの、お時さんよ」

「ずいぶん早く来たのね。なんの用？」

母と娘の会話は、そこでと切れた。

明子は庭へ首をまわした。朝靄が、まだほの青く残っている。お時さんは、明子とおない年ぐらいの、知人の家の女中さんである。

「パンのスイッチ、入れましたか？」

「うん、入れた」

牛乳のあたためたのと、半熟の卵を盆にのせて、母の由紀子が姿を見せた。

「お時さん、これから家へ帰ると言うのよ」

「家へ帰るって？」

「大谷さんを辞めて、家へ帰ると言うの」

「ええ？ どういうわけ」

明子がスイッチを切ると、狐色のパンが二枚、そろっ

て耳を出した。

「困っちゃったわ。ひとの家のことですもの、立ち入ったことも言えないし」

「大谷さんじゃ、知っているの？」

「置き手紙をして、出てきたと言うの」

「いったい、どうしたってこと？」

「きのうはお休みで、お時さん、朝から東京へ行ったんだそうよ。十時過ぎに帰ったら、もうみんな寝ていたそうだけど、お台所に行くと、ライスカレーを食べたお皿が、重ねてあるんですって。それを洗ってしまつて、アルマイトのやかんが眼の前に行列しているから、蓋を取つてのぞくと、大中小、三つのやかんとも、お茶がらでいっぱいなんだそうよ。まず小さいのを使つて、それからお客さんでも来たのかもしれないわ。こんどは中ぐらいのを使つて、一番おしまいには、みんな揃つたところで、湯沸しの大きなやかんで、お茶をいれたつてわけよ。お茶がらつて、方々へくっ着いてなかなか捨てにくいものだから、そんなことしたんでしょう。三つとも詰つていれば、腹も立つだろうと思うの」

「大谷さん、人数が多いから」

「お時さん、なんだかとてもかなしくなっちゃったと言うの。それでも、台所を片づけて、自分の部屋へ戻らう

と思つて、ひよいつと食堂のテーブルの上を見ると、二十世紀の皮を山盛りにしたお皿と、コーヒーポットやコーヒー茶碗が置いてあると言うのよ。あんまりだと思つたら、涙がこぼれて、それで決心したと言うじゃないの。うっかりしたことは言えないし、困っちゃったわ」「きん子ちゃんも、みき子さんも、案外無神経ね」と、明子は大谷家の娘たちの名を言った。

「それに、洋一さんが一枚加わるんですもの。お母さん、なんにもおっしゃらないのかしら。足を拭いた雑巾なんか、そこらへほうりだして、誰もゆすいだことはないって、お時さん泣いてたわ。これは、あなたも耳が痛そうね」

「置き手紙に、みんなそれ書いたのかしら」

「まさか。お暇をいただきますって、それだけだよ」

「三つの、やかんか。さ、出かけようつと」

「あなたも、パン屑くずくらいは、奇麗きれいになさい。なんです、その膝……」

「ナブキンをくれないから」

と、スカートを両手でつまんで、明子が席を立つ。

「三つのやかんが、どうしたというのだ」

緑先が下駄を脱いだ三浦貞作が、もっともらしい顔で

上つてきた。きょうは、会社へ行かぬ日である。「あなたは知っていらっしゃるでしょう？ お時さんが来たの」

「台所で、コソコソ話をしていたのが、その人か」

「大谷さんとこの、女中さんですよ」

「朝早くから、なにごとかと思つた。三つのやかんが、どうしたんだ」

と、貞作はバラ切りばさみを、棚にのせた。

「行つてまいりませう」

夫婦のやりとりを他処よそに、明子の声が玄関にあらた。

三浦家は、だいたいそんな三人暮しである。

焼 栗

毎朝出勤する人は、何輛目のどこと、いつの間にか乗る車の入口まできまつてくる。たまに別の車輛に乗ると、東京へ着くまで、いや半日ぐらい、なんとなく落着かない。

そんな人たちが、寒暖計の目盛りのように、ホームにいくつかの列を作る。

明子がその一つに加わると、次の列の尻しつぽの方か

ら、「アキ」と名前を呼ばれた。

顔がいくつもいくつも並んで、その中にこっちへ会釈もじやしている青年の顔があった。

はじめは見違えたが、

「なァんだ」

と、口の中で言い、明子も微笑を返した。

「来いよ」

「いや。こっちへいらっしゃいよ」

制服制帽の大谷洋一が、素直に明子の列に寄ってきた。

「どうしたの。きょう、早慶戦？」

「冗談言うなよ。面接だ」

「メンセツって？」

「シユウシヨク、シケンシケンの、だよ」

囁んでふくめるといふ言い方で、大谷洋一が明子の耳に、口を持っていった。

「ああ、そうか」

「久しぶりに着たら、咽喉のどが苦しいや」

「背広より、大きく見える」

「いけねえ、ナフタリンが出てきやがった」

と、洋一はポケットから、セロファンの小袋をつまみだした。

「なんていう、会社？」

「決まらないうちは、発表しないよ」

「ええ？　なんて言った？」

電車が入ってきたのだ。

もちろん、席など空いているわけではない。

つり皮だって、必要でなくなるぐらい混んでくる。

「けさ起きたら、お時さんがいないのさ。家じゅう、び

っくりぎょうてんだ」

ああ、そうだ。それだったんだと、明子は思った。あぶなく、そうなんですってねえと、口を出るところだった。

「ふーん。どうして？」

「面接の朝ときているから、お袋が張りきって起しに来て、お時さんがいないって言うのさ。まあ、ゆうべ帰らなかったのかしらなんて、女中部屋へ行ってみると、焼栗の袋と書き置きがあったとさ」

「麦な取り合わせね」

「一粒も、食べてないんだってさ」

「荷物は？」

「そのまま、置いてっちゃったらしいや」

洋一は、胸もとからハンケチを半分つまみだして、また元に戻した。面接のことも、多少気になっているのであろう。

「このごろ、駅前で焼栗を売ってるだろう？ ゆうべあれを買って、帰ってきたんだろうと思うんだ。帰ってきたって、みんな寝ているしよ、焼栗の袋があったかいだけで、淋しいもんですよ。きゆうに、家へ帰りたくなっただんだと思うんだ」

「ヨウビンで、心理描写うまいのね」

「きん子だって、みき子だって、だいたいお時さんと同じぐらいだろう？」と、姉や妹の名を言い、

「ああいうのは、いけないんだな。どうしたって、自分と比較検討するもの」

「何年ぐらいいた？」

「二年近いだろうな。おかしいんだよ。焼栗の傍に、お暇いただきますって、書き置きがあると聞いたら、とたんに、ああ秋だなんて思いましたからね」

「ふーん、ヨウビンが……」

「自分でもおかしいや」

車窓へ向いたまま、明子は笑いをもらした。

すると、焼栗の匂いが、その辺にただよってきた。

鯊

「そうだね。つけてもらおうか」

「まあ、鼻の頭が……」

と、妻の由紀子が笑って、一足先に茶の間へ入っていた。

「そんなに灼けたかな」

「鼻の頭だけ、赤いわ」

「魚のおいという奴は、とれないもんだな。おい、レモンがあったな」

「冷蔵庫ですけど、なにになさるの？」

「手の臭みをとるんだ」

貞作は、勝手口の外へまな板と庖丁を持ちだして、釣ってきた鯊を料理したばかりだった。

「冷えるね、いま時分の時間になると」

レモンの汁を、両手にすりこみながら、貞作は食卓に着いた。

やかに、日本酒の燗がしてある。

「まだ、舟に乗っているみたいだ。体がゆれるんだよ」

「舟は伊藤さんが漕いだのね？」

「おれも、ちよっとやってみたが、止めたよ。年を取ったということが、しみじみ分った」

「どうでしょう、もう少し熱くしますか？」

由紀子が、最初の一つだけ、いつも酌をする。

「御苦労さまでした。すぐ召しあがるでしょう？」

「鯊が釣れるだろう？ 手の平にうけると、鯊の体があつたかいんだな。あれはいいもんだ」

と、貞作がそれをうけた。

「竿は、使えましたか」

「うん、虫は食っていないようだ。四五年ぶりだが、あの辺も変ったよ。びっくりした」

「あの辺といつても、あたしには分らないけど」

「両側が石垣で、上げ潮の時はたっぷり水につかる。橋を一つくぐると、きゅうに町の夕焼空が頭の上にひろがって、船宿の灯がチラチラする。竿の袋と、魚籠を片手に棧橋へ上るとたんに、ああ早く一杯呑みたいなと思う。あの、帰ってきた時の気分がいいんだが、棧橋どころか、石垣の上はギッシリ工場だ。鯊もいなくなるはずだよ」

「いくつぐらい、釣れました」

「こんなのや、こんなのを混ぜて、二十七かな。串へさしておいたから、とにかく明日、素焼にしておいてもらいたいな」

ガスコンロを食卓にのせて、由紀子は鍋物を煮はじめる。

「明子は、きょうは晚いのか」

「お友だちと、音楽会だとか言っていました」

ボストに、夕刊の入る音がする。

そのくらい静かだし、配達も一番後まわしの地域なのだ。

「きょう、大谷さんの奥さんが、お寄りになったのよ」

「女中がいなくなつたというのに、よく出歩くな」

「妙台寺の、菊花品評会の帰りだとかって」

「ああ、そういえば、出がけにバスの中から、品評会の看板に日が当たっているのを見た。おれは、ああいう菊は嫌いだよ、バーマネットかけたようなばかりじゃないか」

由紀子は、ゆっくり豆腐を鍋に沈めて、

「大谷さんの奥さんが、その湘南薬局に寄ったらね、あなた」

「そういう話は、釣りの後では聞きたくないな。どうせ、誰かの噂だろう」

「明子のことなんですよ」

「あのくらしいの年ごろになると、多少とも口の端にのせられるさ」

「それがね……内聞きらしいのよ」

「ないぎき？ 誰なんだ、相手は」

「そんなこと、あたしだって判りゃしませんわ」

貞作は無意識に、鼻の頭を撫でまわした。皮膚が、そ

こだけ突っ張るのであらう。

「湘南薬局のおかみさんが、三浦さんじゃ、ご縁談があるようですねって、大谷さんの奥さんに言うんですって。それから話になったらしいの」

「湘南薬局に、明子のことを訊きに来たわけなんだね？」

「そうよ。あなたに、心当りのあるはずはなし、誰なんでしょう」

「……おい。まだ体の揺れがとれないや。舟に乗っているような気分だ。もう一本つけてくれ。それから、羽織はまだ出してないかな。少し冷えるんだ」

貞作は杯を一息にあげ、襟を合わせた。

柱時計の刻みが、きゆうに冴えてきた。

銀座にて

洋一が門口のベルをおすと、やがてスリッパの音が聞えだす。

いつもの、わが家の気配だった。

頭の上に灯が点いた。

「おれだ」

「なんだ、ヨウビンか」

二つ年上の姉のきん子が、ドアをあけて、視線が合う

なり、

「速達は、まだよ」

と、つけ足した。

面接試験から三日目だから、顔を見るなりそんな言葉が出るのだ。

洋一は、そんなものは気にしちやいないんだという無表情で、

「飯食うよ」

と、靴を脱ぐ。

「あら、首筋が奇麗じゃない。床屋へ行ったの？」

「腹が減ったよ」

洋一はずんずん、食堂へ行く。

「みき子たちは？」

「この間撮ってもらった、カラーフィルム拝見よ」

「姉さんは、行かないのか」

「行ってたら、あんたが困るじゃないの」

「きょう、四時ごろかな。銀座を歩いてたら、アキの親父に会っちゃった」

と、脱いだ上着を椅子の背に引っかけながら、洋一が伸びまじりに言った。

「ロール・キャベツよ。まだあったかいけど、熱くする？」